駅近の団地をリノベーション／自宅ガレージでパン屋をはじめる／街で暮らして、田んぼに通う　6家族、6つの暮らし。

KOBE NEW TOWN

神戸・三宮から地下鉄で1本。名谷（みょうだに）・西神（せいしん）。



ニュータウンって、
こんな暮らしもありなんだ。

ご自由にお持ちください
TAKE FREE

2026 DECEMBER

KOBE NEW TOWN

神戸・三宮から地下鉄で1本。
名谷（みょうだに）・西神（せいしん）で暮らす6家族の話。

2026 DECEMBER

ニュータウンって、
こんな暮らしもありなんだ。

02　ニュータウンを、住む人の毎日から。

名谷

06　長谷川さん／駅近団地のリノベーション

12　木下さん／自宅ガレージのパン屋さん

18　西垣さん／用事も楽しみも徒歩圏内

西神

26　久米さん／子どもの足で広がる毎日

32　羽田さん／気ままなご近所づきあい

38　新宅さん／街暮らし、田んぼ通い



ニュータウンを、住む人の毎日から。

整った街並み、似たかたちの住まい。
ニュータウンと聞くと、そんな風景を思い浮かべるかもしれません。
けれど、近づいてみると、周りに広がる景色も、
そこで暮らす人が大切にしていることも、
街ごと、人ごとに違います。

計画された街で、いま、どんな毎日が育っているのだろう。

KOBE NEW TOWNは、住む人の話を聞きながら、
神戸のニュータウンそれぞれの豊かさを訪ねていく冊子です。

今回訪れたのは、神戸の中心街・三宮と地下鉄でつながる、
「名谷」「西神中央」とその周辺。
買い物や日々の用事に便利な駅前は、
大規模なリニューアルを経て、新しい姿に。
住宅街には、緑の中を歩ける道や公園が広がっています。

そこで出会ったのは、6組の家族。
駅に近い団地を、好きな住まいにつくり替えた夫婦。
公園や習い事へ、自分の足で出かけ、少しずつ世界を広げる子どもたち。
毎日の便利さも、大切にしたいことも、ふだんの暮らしの中にある。
私たちは、そこに名谷・西神中央の豊かさを感じました。

ぜひ住人になった気分で、隣人の話を聞いてみてください。
「こんな暮らし方も、ありなんだ」。
その出会いが、あなたのこれからを思い描くきっかけになれば。

ようこそ、神戸のニュータウンへ。



みょうだに
名谷の、新しい日常。

名谷 — 神戸市営地下鉄 約20分 — 三宮 — JR神戸線 約21分 — 大阪

三宮から地下鉄で約20分。2025年、駅ビル「tette名谷」が全館オープンし、ショッピングセンター「須磨パティオ」もリニューアルした。フードコートや子どもの遊び場も加わり、駅前での過ごし方が広がっている。図書館や区役所の支所もあり、買い物と日々の用事をまとめて済ませられる。住宅街には、車道と分かれた歩行者専用道「赤道（あかみち）」が続く。登下校時、車を気にせず、子どもたちが楽しそうに行き交っている。



①名谷駅前広場
土日にはマルシェなどのイベントが開かれることも。手づくりの雑貨やお菓子などを見て回る楽しみがある。

②落合中央公園
名谷駅北口から徒歩約5分。身近に豊かな自然がある。

③名谷図書館
大丸須磨店4階。買い物帰りにも立ち寄りやすい図書館。



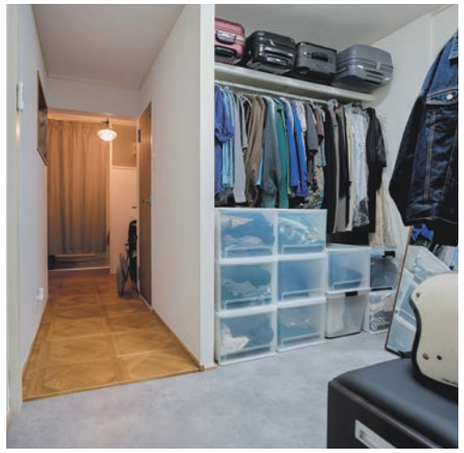


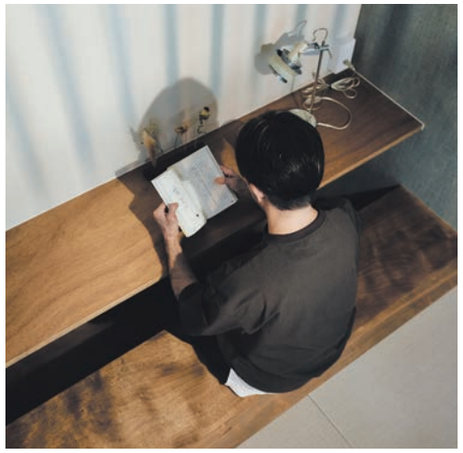
MYODANI
PEOPLE
1

駅近団地のリノベーション

ぱっと出かけて好きな家へ帰る

長谷川さん夫妻
雅之（まさゆき）さん、亜子（あこ）さんは、ふたりとも西宮市出身。雅之さんは障害者支援施設に勤め、亜子さんは就労支援に携わる。結婚後は名谷の隣駅にあるUR団地で暮らし、2025年、名谷の団地の一室を購入。約62平方メートルの住まいをリノベーションし、入居した。









夜8時から、もう一度出かける

亜子さんが加古川での仕事を終え、名谷駅へ戻るのは午後6時半ごろ。夕食の食材を買い忘れても、駅前の店に寄って帰ることができる。スーパーや日用品店に加え、医療機関や銀行もそろい、「必要なものは、だいたい何でもあります」と雅之さんは話す。二人とも早く帰れた日は、夕食を食べ終えた午後8時ごろから、もう一度家を出る。カフェで過ごしたり、小腹が空けば「2度目の晩ごはん」を食べたり。駅前には、ドトールやスターバックスなど、カフェだけでもいくつもの選択肢がある。日中の買い物には、ロフトや無印良品も。「選び放題です」と亜子さん。こうした店が、家から歩いて10分以内に集まる。リニューアルで店が増えた駅前を、亜子さんは「リトル・トーキョーみたい」と笑う。

玄関からの眺め。アーチは、空間を広く開けて見せるために欲しかった。これも、団地の一室。



駅まで5分の家

二人が家の購入を考え始めたのは、結婚して1年半ほどたったころ。最初は、平屋を建てることも考えた。しかし、予算内では駅から離れた不便な場所になる。他の街の中古マンションも見たが、管理費や修繕積立金などが月4万～5万円ほどかかると分かり、見送った。「家の中へ入ってしまえば同じなのだから、駅に近くて住みやすい場所の方が、自分たちに合っているんじゃないか」。そこで、中古の団地を買い、好きな空間につくり替えることにした。46歳の雅之さんは、「少し早いですけど、老後を考えたことが一番です」と話す。老後に車やバイクを手放しても暮らせる、駅に近く平坦な場所を選びたかった。名谷で内覧したのは、この一室だけ。未改修の部屋を選んだ。購入費用とリノベーション費用を合わせると、新築マンションの価格の半分程度だった。建物は築約48年で、エレベーターはない。二人は2階までを条件に探し、本当は2階を希望していたが、見つけたのは1階だった。それでも、駅までは平坦な道を歩いて約5分。三宮へも電車で約20分という立地は魅力だった。

築48年の内側をつくり替える

「図工のように、自分で何かをつくることが好き」という亜子さん。約2か月間、二人は間取りや素材をひとつずつ決めていった。亜子さんは、アーチ形の扉や、壁に使う木材の色に特にこだわった。床には、費用が少し高くなっても「どうせなら好きなものにしよう」と、気に入ったフローリングを選んだ。亜子さんのセンスを信頼する雅之さんも、少しこもれる小上がりを希望し、照明選びを担当した。「リノベーションは、楽しかった記憶があります」と亜子さんは振り返る。二人が手を入れたのは、見える部分だけではない。断熱性を高めるため、すべての窓を二重窓にした。室内は1年を通して過ごしやすく、外へ出て初めて違いに気づくほど。気密性が高まる一方、湿気やカビへの対策として24時間換気を取り入れ、水回りの配管もすべて更新した。築48年の部屋を、長く暮らせる住まいへつくり替えた。

団地ならではのご近所づきあい

団地には管理組合があり、棟の住民で役割を分担する。入居して間もない二人にも当番が回り、亜子さんは月に1回の会合へ参加している。さまざまな世代が集まり、年代や考え方の違いから、話がまとまらないこともあるという。亜子さんは「大変だと思う人は大変だろうな」と率直に話す。それでも二人は、「ちょっとしたためんどくささの中に、人と人とのつながりや温かさがある。こういうのも、ありやな」と受け止めている。住民が自分たちで団地を運営する仕組みを、雅之さんは面白いと感じている。「地域で暮らしている感じはありますね」。ある日、二人のもとへ地域の川柳募集の案内が届いた。お題は「石油」。「石油か。考えなあかんな」と亜子さんは笑う。



MYODANI
PEOPLE
2

自宅ガレージのパン屋さん

家の一角から
私の店がはじまった

木下透衣（ゆきえ）さん
神戸市出身。夫と、高校2年生の長女、高校1年生の次女、年長の三女との5人家族。長女が生まれてから名谷へ移り住んだ。自宅の厨房でパンと焼き菓子をつくり、「ココベイク」として各地のイベントに出店。自宅ガレージの店を月に1〜2回開いている。

家のガレージには、いま、車1台と小さな店が収まっている。

「買いたい」に背中を押されて

長女と次女が幼かったころ、透衣さんはよく家に友達親子を招き、パンや焼き菓子を焼いた。もともとお菓子づくりが好きで、専門学校でもパンやスイーツづくりを学んでいる。そのうち、「作ってほしい」「買いたい」と言ってくれる人が現れた。「好きなことで仕事になったらいいな、という気持ちで、売るには資格がいるのかな、自分にもできるのかなと調べました」。店舗も探したが、売れるかどうかにかかわらず家賃がかかる。まずは家でやってみよう。自宅の一室を厨房に改装し、2018年からイベントへ出店するようになった。ガレージでもハンドメイドの雑貨とパンを並べるマルシェを開いた。テーブルのまわりに人が集まると、車で通り過ぎた人まで戻ってくることも。次第に、近所の人から「次はいつ?」と聞かれるようになった。

ショーケースだけのつもりが

2020年、三女が生まれた。末っ子の三女が幼稚園に入るまではイベントへの出店を休むつもりだったけれど、そのころには主催者から出店の声もかかるようになっていた。せっかく声をかけてもらえたのだから、できる範囲で続けたい。保育園に末っ子を預けながら活動を続けることにした。コロナ禍には、インスタグラムで予約を受け、自宅でパンを渡すようになった。イン

ガレージの思いがけない使い道

月に1〜2回、名谷の住宅街にあるガレージがパン屋になる。児童館帰りの親子がパンを買い、その場でおやつを食べていく。散歩中の年配の人も立ち寄れば、開くたびにまとめ買いをしてくれる常連さんもいる。営業日が少ないので、「お店が開いているのを初めて見た」とまだ言われることもあるそうだ。「ココベイク」を営む透衣さんは、このガレージの上の戸建てに、家族と暮らしている。パンや焼き菓子は、住まいの一室を改装した厨房で焼く。家探しで夫がこだわったのは、屋根があって車を2台停められる駐車場だった。神戸市垂水区の実家にも行きやすく、名谷駅前には区役所の支所や銀行などもそろう。そうして選んだ





店頭で販売する揚げパンは、定番の「白パン」をその場で揚げたもの。外はカリッ、中はモチッ。









ターホンを押してもらう方法では、通りがかりの人にはパン屋だと分からない。それではもったいない。ガレージにショーケースを置いて販売しようと考えた。そこから「1日ここにいるならドリンクも出せたらいいな」と、構想が膨らんでいく。保健所に相談すると、許可を取れることも分かった。厨房を手がけた大工さんにガレージに収まる店舗をつくってもらい、2021年に開店。イベントでは出会わなかった近所の人も訪れてくれるようになった。「ココベイクさんやったんや」。保育園の行事で声をかけてくれたのは、店のお客さんだった。そこから仲良くなり、いまでは家族ぐるみの付き合いになっている。



次に
つくりたいものは

来年、末っ子が小学校に上がる。送り迎えがなくなれば、朝から使える時間が増える。いまはイベントへの出店が中心だが、これからは出店先を絞り、自宅ガレージの店を開く日を増やしていきたい。厨房の広さや設備には限りがあり、別の場所に店舗を持つことも考えている。でも、自宅のガレージだからこその働きやすさも感じている。「ここにもっと人が集まってくれるなら、別の店を持たなくてもいいかもしれません。そうなれば、この場所でできることをもっと考えたいです」。営業日が増えれば、それに合わせて仕込みができ、メニューも考えやすくなる。お菓子を充実させて、以前からやってみたかった喫茶も始めたい。パフェをつくって、ここでゆっくり食べてもらうのもいい。「やりたいことはいっぱいあります」



MYODANI
PEOPLE
3

用事も楽しみも徒歩圏内

カフェも里山も歩いて行ける

西垣美和（みわ）さん
名谷で育ち、20歳で大阪へ。息子の小学校入学に合わせて名谷へ戻った。現在は名谷駅から徒歩10分足らずのUR団地で、夫と社会人の息子と暮らす。介護士として神戸市北区へ車で通勤。地域団体「名谷ワッショイ」の副代表を務める。











道が赤いから、赤道。そう呼ばれている。せきどう、ではありません。

車を気にせずに緑を眺めて歩く

「気が向いたら、赤道（あかみち）をずっと散歩するんです」。神戸市のニュータウン、名谷で生まれ育った美和さん。大阪で約10年暮らした後、息子の小学校入学に合わせて戻ってきた。そんな美和さんに、街を案内してもらった。住宅街から駅や小学校、公園などへとつながる赤道は、車道と分かれた歩行者専用の道。道沿いの緑を眺めながら、車を気にせず歩ける。信号待ちもない。「ストレスがないですね。緑があって、散歩もしやすいです」。高校時代は赤道を通って名谷駅へ出て、地下鉄で高校へ通った。戻ってきてからは、息子と一緒に歩いた道でもある。いまは、自分のリフレッシュのために歩いている。「赤道って、ほかのところにもあると思っていたんです」。名谷以外の地域の人に赤道の話をしたとき、何のことか伝わらず、驚いたという。この取材中にも、カメラの前を通った女性が「ごめんね」と声をかけてくれた。人とのさりげないやりとりも、この道にある。

朝のカフェも買い物もすぐ近く

駅前では、ホットドッグ店「トミーズ」のポテトでひと休み。高校生のころから知っている店には、息子の学校行事の帰りに一緒に立ち寄ったこともある。「名谷ならではのお店となると、トミーズって言いますね」。夫と息子と暮らす家から、名谷駅までは歩いて10分足らず。最近は、カフェのモーニングを楽しむことが増えた。平日の休みに

出かけ、本を読んだり、動画を見たりして過ごす。家ではなかなか落ち着かないから、あえて外へ出て、一人でゆっくりする。その後はスーパーのダイエーやマルハチで買い物をして、家へ。百貨店の大丸もあり、スイーツを手土産にすることもある。介護の職場へは車で通い、買い物は仕事帰りに済ませることが多いけれど、歩いて出かけられる駅前でも用事が済む。三宮までは、名谷駅から地下鉄で約20分。三宮のカフェへ足を延ばして、一人の時間を過ごすこともある。

駅前から歩いて5分
里山の中へ

駅前からゆずりは橋を渡り、落合中央公園の里山へ。買い物や食事をする駅前から、歩いて5分ほどで緑の中へ入れる。同じ公園にあるグラウンドは、息子が小学3年生から本格的にサッカーを始めた場所。当番や試合で、何度も足を運んだ。「休日はサッカーばっかりでしたね」。息子は社会人になったいまも、サッカーを続けている。身近な街を歩くと、思いがけないものにも出会う。美和さんが副代表を務める地域団体「名谷ワッショイ」の散歩では、化石や地層を見つけることも。「ちょっと歩いたらニュータウンの中でも発見がいっぱいあります」。長く暮らしている街にも、まだ知らない顔がある。





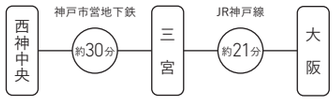
ひとりでも
誰かとでも心地よく

何か始めたいと思ったときに受けた地域の講座が、「名谷ワッショイ」に加わるきっかけになった。駅前広場のイベントにも関わっている。ある日、カフェで隣り合った女性に、「今日は駅前広場、何もやってないね」と話しかけられた。広場のイベントを見るのを楽しみに来ているという。自分たちの活動も喜んでくれる人がいると知って、うれしくなった。一人でゆっくり過ごせて、ふとした会話も楽しめる。そんな街の雰囲気が、美和さんは好きだ。「嫌なところにぐいぐい入り込んでこないというか、ちょっと察してくれるような感じ」と話す。家でほっとできることも大切だ。暮らしているUR団地は、共用部の掃除や草刈りが行き届いているのが気に入っている。緑を眺めて歩き、カフェでひと息つき、ときには誰かと話す。そんな名谷の日々に、不便なことはないだろうか。「ぱっと思いつかないですね」。美和さんは、少し考えてそう答えた。



せいしんちゅうおう

西神中央の、新しい日常。



三宮から地下鉄で約30分。始発駅の西神中央では、この数年で駅前の風景が変わってきた。商業施設「プレンティ」がリニューアルし、「エキソアレ西神中央」も開業。区役所も移転してきた。図書館とホール、カフェを備える「なでしこ芸

三宮から地下鉄で約30分。始発駅の西神中央では、この数年で駅前の風景が変わってきた。商業施設「プレンティ」がリニューアルし、「エキソアレ西神中央」も開業。区役所も移転してきた。図書館とホール、カフェを備える「なでしこ芸



①プレンティ広場
芝生やベンチで、買い物の合間にひと休み。写真は、夏に開催されたビアガーデンの様子。

②なでしこ芸術文化センター
2023年にグッドデザイン賞を受賞。表紙の写真はこの建物の屋根。

③おやこふらっとひろば西
西区役所3階。親子が無料であそべる屋内スペース。





SEISHIN

PEOPLE

1

子どもの足で広がる毎日

ずっとそばにいなくても ちゃんと見守れる

久米（くめ）さん一家

西神中央駅から徒歩15分ほどの一軒家で暮らす5人家族。西神中央育ちの碧（みどり）さんと、徳島県出身で神戸市内で働く夫・守之（もりゆき）さん、11歳の長男、8歳の次男、6歳の長女。碧さんは元小学校教員。家族みんなの名前を、イニシャルの「M」でそろえている。

「子どもが自分で動ける場所」が家選びの条件だった

久米さんの家の目の前には、公園がある。「もう庭だと思ってるんです」。窓から遊んでいる姿が見えるので、子どもだけで出ていっても、「帰っておいで」と声をかけられる。家を探していたころから、夫婦にはひとつの基準があった。「共働きでも、子どもが自分で習い事に行って、帰ってこられるような場所がいいなって。何でも一人でできる場所がいいと思っていました」。碧さんは大学進学を機に徳島へ行き、そこで守之さんと出会った。結婚を機に二人で神戸へ移り、西神中央で暮らし始めた。碧さん自身、この街で育った経験から、子どもが暮らしやすい環境だと感じていた。最初は賃貸住宅に住み、2年後に戸建てを購入。広さや庭よりも、駅や公園が近く、子どもがいつか自分の足で動けることを大切にした。



一人で行ける場所が少しずつ増えていく

学校から帰ると、長男と次男はそれぞれ遊びや習い事へ向かう。「もう、消えます（笑）」と碧さん。予定はカレンダーで確かめ、自分で行ける場所には自分で行く。もちろん、遠い習い事なら親が送り、夜遅くなれば迎えにも行く。でも、公園や駅前など、一人で行ける場所は少しずつ増えてきた。近所にはいくつもの公園があり、駅前や地域の施設には習い事の選択肢もある。小学校までは歩いて10分足らず。街には広い歩道が続き、場所によっては車と歩行者の動線そのものが分けられている。ニュータウンとして計画された街のつくりが、何十年たったいまも、子どもたちが自分で動ける暮らしを支えている。

親の目が届かなくてもひとりにはならない

安心できる理由は、道のつくりだけではない。長男が小学校へ入ったとき、



長男はサッカーへ一人で向かう。「気をつけてね」は、毎回の声かけ。

目が届かない場所にも、子どもを知る誰かがいる。

この街が子どもたちの故郷になる

碧さんは以前、小学校教員としてフルタイムで働いていた。朝7時に保育園へ預け、夜7時に迎えに行く毎日。「受け持っている子どもたちの成長はいくらでも言えるけど、我が子のことは知らない、みたいな感じでした」。母を亡くしたことや、幼い長男から「またお迎えが遅くなるのは嫌だ」と言われたことも重なり、好きだった仕事を辞めた。「自分の子どもをしっかり育てた経験を、いつか戻るときの自分の武器にしよう」。そう決めて、子どもたちと過ごしてきた。いま、その子どもたちは親のそばから少しずつ離れ、自分たちで街へ出ていく。いつか海の見える場所に住みたい、と碧さんが話すと、子どもたちは嫌がるという。「ずっとここに住んでいてほしい。ここが大好きだから」。自分で歩ける道があり、遊べる場所があり、名前を知る人がいる。そうやって少しずつ自分の世界を広げてきたこの街が、子どもたちにとっての故郷になっている。





同じ保育園から同じ小学校へ進んだ友達は一人もいなかった。最初は碧さんも一緒に公園へついていった。すると、上級生たちが次々と長男の名前を呼んだ。「みんなが名前を知ってるんです。それを見て、大丈夫やなって思いました」。近所のお兄ちゃんが学校まで一緒に行ってくれ、校長先生は子どもの誕生日まで覚えている。近所の人から「大きくなったね」と声をかけられることも多い。夏のラジオ体操に1度しか行かなかった長女にも、地域の人は「1回来てたやろ」とお菓子を取っておいてくれた。計画されて生まれた街に、年月をかけて人のつながりも育ってきた。親の



SEISHIN
PEOPLE
2

気ままなご近所づきあい

人の顔が見えるほど街が好きになった

羽田（はだ）さん一家
尚子（なおこ）さん、夫の努（つとむ）さん、保護犬の春吉（はるきち）の2人と1匹暮らし。娘ふたりは独立。結婚後、三宮、塩屋を経て西神中央へ移り、20年以上暮らす。尚子さんは自宅近くで保育士として働き、努さんは大阪の企業に勤務している。尚子さんは友人と「トナルバ」という団体を立ち上げ、本を通じた場づくりにも取り組む。



「飼うなら絶対に保護犬」と努さん。足元にじゃれついた1匹を迎えた。

仕事は都市に
暮らしは西神中央に

朝5時半、尚子さんは保護犬の春吉と散歩に出る。家の近くにはいくつもの公園があり、歩けばいつもの犬仲間に会う。午前中は、自宅から徒歩5分ほどの職場で保育士として働く。午後は地域での活動に時間を使うことも。夕方になれば、春吉と2回目の散歩に向かう。一方、夫の努さんは大阪へ週2〜3回出社し、東京出張も多い。大阪へ通う努さんを見てきた尚子さんは、「毎日だったら、やっぱりしんどいと思います」と話す。それでもリモートワークが増え、都市での仕事と西神中央での暮らしを、以前より両立しやすくなった。三宮育ちの努さんも、いまでは「三宮だったら、庭なんて無理やね」と話す。都市との距離は少しある。でも、



ここには庭があり、大型犬と暮らせる家がある。

好きだった塩屋から西神中央へ

結婚後、三宮を経て、海の見える街・塩屋へ移り住んだ尚子さん。人や店がつくる街の味わいを気に入っていた。けれど、子どもが生まれると、住む場所に求めるものが変わっていった。仕事を続けながら、無理なく子育てできることも大切になったのだ。当時、職場近くの保育園には入れず、子どもは西神中央の園に通っており、送り迎えは大きな負担だった。家族のこれからを考えると、西神中央の方が、毎日の暮らしを組み立てやすい。そうして一家は西神中央へ。努さんの両親との同居も見据え、戸建てを選んだ。それでも、住めばすぐ街を好きになれたわけではない。第一印象は「のっぺらぼうな街」。住んでいる人の顔が見えない、と感じた。

春吉と歩いて人が見えてきた

引っ越してからは、仕事と子育てに追われ、地域との接点は少ないままだった。その後、義父母の介護でフルタイムの仕事を離れたころ、尚子さんは

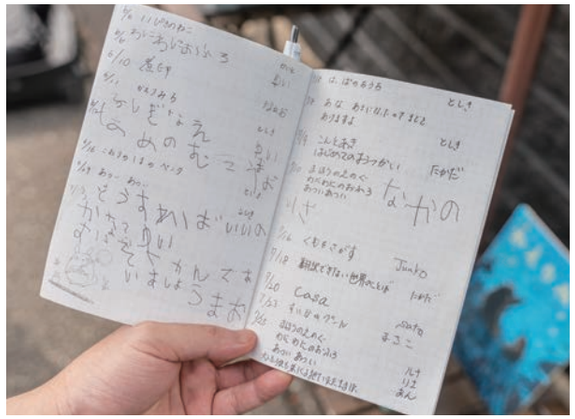
孤独を感じた。「そのときは、すごく孤独だったんです。近くに、ふらっと行ける場所があればいいなって」。街との距離が変わり始めたのは、2021年に春吉を迎えてからだ。朝夕の散歩で顔見知りが増え、絵本の読み聞かせのボランティアをしてみたいと話せば、犬仲間が地域のグループを紹介してくれた。変わったのは尚子さんだけではない。努さんにも、春吉との散歩を通じて顔見知りが増えた。「夫との会話も犬の話ばっかり。『今日、誰々ちゃんに会った』とか(笑)」。そして、自宅前には、近所の人が自由に本を借りられる「Little Free Library」がある。「私も借りていいんですか」と声をかけてきたのは、数軒先の人だった。本を通して、俳句や写真など、挨拶だけでは見えなかった「好き」が見えてくる。「一面しか見えていなかった人が、立体的に見えてくるんですよね」と尚子さん。人がいなかったのではない。見えていなかっただけだった。

人との距離を自分で選べる

西神中央は、まちびらき以降、さまざまな場所から人が移り住んできたニュータウンだ。尚子さんは、この街の人との距離についてこう話す。「自分で選べる感じだと思います。無理に近づかなくてもいい。でも、距離を縮めたければ、縮められる」。いま尚子さんは、友人と「トナルバ」という団体を立ち上げ、本をきっかけに、それぞれの「好き」で人がつながる場づくりをしている。目指すのは、話してもいい、話さなくてもいい「屋根のある公園」。現在、コミュニティライブラリーを開設するための場所をこの西神中央で探している。「好きな人が増えたら、その場所が好きになるんですよね」。かつて「のっぺらぼう」に見えた街で、人の顔を見つけてきた尚子さん。彼女がこれからつくる場を通じて、また誰かが、自分なりの距離で、この街とつながっていくのかもしれない。











SEISHIN
PEOPLE
3

街暮らし、田んぼ通い

ふたつの場所で子どもは育つ

新宅雅美（しんたく・まさみ）さん
夫の隆史（たかふみ）さん、高校3年生の長男・健太郎（けんたろう）さん、中学2年生の次男・佑輔（ゆうすけ）さんの4人家族。雅美さんは須磨ニュータウン育ち。結婚後、西神ニュータウンへ移り住んだ。一般社団法人musubiを立ち上げ、小学生に米づくりを教えている。



農家ではなく、住宅地に暮らす一家が育てる稲だ。

車で20分
田んぼのある暮らし

雅美さんの家から車で15〜20分。西神ニュータウンからほど近い農村・神出（かんで）に、一家が通う田んぼがある。夏場は水の様子を確かめるため、毎日のように足を運ぶことも。晴れた日には、朝に水を入れても夕方には減ってしまう。再び水を足し、夜にもう一度、水を止めに行く。草刈りの時期は、暑くなる前の朝6時台から作業を始める。農家ではなかった一家にとって、何もかもが手探りだった。けれど、米づくりを始めてから、田んぼへ向かうことは特別な行事ではなくなった。近くの直売所へ立ち寄れば、旬の野菜も手に入る。自分たちで育てた米と、近くで採れた野菜が家族の食卓に並ぶ。公園や学校のある住宅地で過ごし、季節に応じて車で農村へ向かう。ふたつの場所を行き来する暮らしが、一家の日常に根づいている。

兄の「好き」が
弟の米づくりへ

始まりは、子どもたちの自由研究だった。新宅家では、子どもがその年にいちばん好きなものを決め、親子で1年かけて追いかける。長男の健太郎さんは虫が好き。蚕を育て、繭から糸を引き、織物に仕上げた。その次に選んだのが、ニホンミツバチ。飼っている人を探すなかで、神出で米をつくる農家さんと出会った。分けてもらった米を食べると、それまで食べていたものとは味が細かった次男の佑輔さんが、よく食べるようになったという。佑輔さんが自由研究をはじめる時、雅美さんが「何がいちばん好き？」と尋ねると、答えは「お米」だった。米づくりについて相談したものの、最初は「そんな簡単に言うな」と断られ、バケツで育てる方法を勧められた。けれど、佑輔さんが望んだのは、農家さんと同じように田んぼで米をつくること。諦めずに雅美さんと二人で何度も通ううち、使っていなかった小さな田んぼを借りられることになった。兄の「好き」から生ま



れた出会いが、弟の米づくりへとつながっていった。

孫のように見守ってくれる「田舎」ができた

田んぼへ通ううち、農村にも知り合いが増えていった。雅美さんが水を止め忘れたときには、近くのおばあさんが「止めといたで」と声をかけてくれた。農家さんから野菜を分けてもらうこともある。仲良くなった人たちは、佑輔さんを「ゆうちゃん」と呼ぶようになった。中学2年生になったいまは部活動に夢中の佑輔さんも、田植えや稲刈りには参加している。作業の節目には、子どもたちと農村の神社へ参る。収穫した米を奉納するのも、一家が大切にしている習慣だ。新宅さん一家には、帰省する「田舎」がなかった。

けれどいま、車で15〜20分の神出には、子どもたちを孫のように見守ってくれる人がいる。そこはいつしか、一家にとって「田舎」のような場所になっている。

学校の外にも、自然や人から学べる場所がある

佑輔さんは米づくりを通して、自然が思いどおりにならないことを知った。困れば農家さんに教わり、村の人に助けられてきた。健太郎さんは、中学時代に学校へ通えない時期があった。その後、生き物への関心を生かせる農業高校へ進み、卒業後は農業大学で自然資源と経営を学ぶ予定だ。



学校の外で好きなことを深めてきた時間が、知らなかった道を選ぶときの土台になった。雅美さんは一般社団法人musubiを立ち上げ、小学校で使われなくなったビオトープを田んぼに再生し、そこで小学生に米づくりを教える活動を続けている。農家さんから受けた恩を、今度はほかの子どもたちへ。「お米は、もうツールでしかないんです」。友達と過ごすニュータウンと、家族や先生とは違う大人に出会う農村。ふたつの場所を行き来しながら、子どもたちは育ってきた。



雅美さんが運転する軽トラの荷台には、ゆうちゃんをモチーフにしたロゴマークが。ゆうちゃんの米づくりは、台風の影響で1年目の収穫が45キロ。翌年は325キロを収穫した。

KOBE
NEW TOWN

note
「#じっさいどぉなん神戸」
kobe-note.jp

ホームページ
www.city.kobe.lg.jp

インスタグラム
@my.sweet.kobe

ご感想を
お聞かせください

クリエイティブディレクター
山形 有弘（神戸市）
森平 周　（神戸市）

アートディレクター・デザイン
山形 有弘（神戸市）

取材・記事
森平 周　（神戸市）

撮影
二宮 幹
水口 達也
山形 有弘（神戸市）

制作
神戸市



KOBE NEW TOWN
名谷・西神

2026年12月 発行
企画・制作・発行：神戸市

©2026 Kobe City. All rights reserved.